

(十九) 離婚届

洋の葬式が終わり、百恵が一枚の紙切れを持ってジャンⅡジャックのもとに訪れたのは、それから数日後の事だった。

「なんでですか？それは……？」

百恵に手渡された紙切れを手にしたジャンⅡジャックは、静かに百恵を見つめた。

それは紛れもない離婚届^{りこんとど}けだった。妻の欄^{らん}には、山口百恵の名と印鑑^{いんかん}も既に^{すで}押しあてられていた。

「私、本当にいろいろ考えました。でも、あなたの言うとおりに、こうするのが一番いいと思っ
て……」

百恵は自分でも不思議なくらい淡々^{たんたん}と言った。

ジャンⅡジャックは言葉を詰まらせた。洋が死んだ時に胸^{おほ}を覆い尽くした百恵を愛おしく思う感情は変わっていないかったし、「貴方のお父さんに貴方の事を任せました」とは、いまさら言えることではなかった。言ったところで信用してもらえない次元の話でない。とりあ

えずソファに百恵を招くと、あれこれ思いをめぐらせながら、二つのマグカップにコーヒーを注ぐと接待用の机の上に静かに置いた。

「離婚届ですか……」

「お父さんが死んで、家はお母さんひとりになっちゃうんです。いい機会だと思って……。家の荷物はまとめましたから、もう出ていくだけになってます。あとは浩幸さんがここに名前と印鑑を押すだけ」

百恵はとてもジャンジャックの顔を正視できなかつた。しかしその口調は、会いたくもない大嫌いな異性に会って、自分の意志を伝える時のような冷淡れいたんなものだった。いつまでそんな態度で話ができるか、百恵は今にもあふれ出しそうな悲しみを必死に押さえ付けていた。

「市役所へは私が届け出ますので、これで全部おわりです」

明るさを装よそおった精一杯の百恵は、これだけ言ううと俯うつむいたまま黙だまり込んでしまった。

「お父さんが亡なくなって気を落としているでしょう。本当にすみませんでした。すべて僕のせいです。心から謝ります。なんてお詫わびを言おうかずっと考えていました。しかし、何とも思いつきませんでした——。お母さんの様子はいかがですか？」

「だいぶ落ち着ききましたが、なんかぼーっとしていて、何もする気がおこらない様子です」

「そうですね……」

ジャンⅡジャックは百恵にコーヒーを勧めた。しばらく百恵はそれを飲もうともしなかったが、やがて薬指のビーズの指輪を見た瞬間、突然、堰を切ったように話し始めた。

「私から言うのもへんですけど、大樹君の事、よろしくお願いします。やっぱり実の父親と生活するのが一番いいと思うから……。だけど、相変わらずカップラーメン好きみたいだから、あまり与えすぎないでね。それからゲームのやりすぎ、テレビの見すぎ、気をつけて。なんだか最近視力落ちてるみたい。小学生から眼鏡なんて、少し可哀想だから。それから夜更かし。朝、起こすの大変だから。規則正しい生活を取り戻すの、けっこうたいへんだったよ！それから授業参観であなたが出れない時は教えてね。それくらいいいでしょ。私だつて大樹君の成長がたのしみなの……」

終わりの頃にはもう涙で言葉にならなかった。

「百恵さん……」

「それから、浩幸さんの持ち物も書斎にそのままになってますから——」

百恵の慟哭はジャンⅡジャックを一段と苦しめた。

「百恵さん——」

そう言いかけたが、浩幸の理性がジャンⅡジャックの感情を押さえ付けた。

これでいい——。

これでいいんだ——。

これが百恵さんにとって一番幸福しあわせになれる道なんだ——。

突然、偏頭痛へんずつうがジャンⅡジャックを襲った。彼はそれを洋の怒りいかだと感じた。しかし時計を見ればそろそろ薬の時間で、慌じょうざいてて錠剤を取り出すと、コーヒーと一緒に呑み込んだ。

「どうしたの？ 頭が痛むの？」

「いや……、なんでもない……」

暫く頭を抱えてうずくまっていたが、ようやく頭痛がおさまって顔をあげると、そこに心配そうに自分を見つめる美しい百恵の顔があった。

お父さん、すみません。やはり僕のこの身体では、百恵さんを幸せにすることなんか絶対できない。明日死ぬかも知れないのですから！ だから、だから、僕は、僕なりに、少し距離

を置いて彼女を見守り続けていたいと思います……。

ただどご安心ください、これだけは誓います。彼女が困った時は、いつでもその力になるということ。

僕の命が続く限り――。

あなたの死に報いるために――。

百恵の表情はジャンⅡジャックにとって美しすぎた。思わず潤んだ両目を隠すために、慌てて立ち上がって背を向けた。

「万年筆はどこだったろう――」

胸のポケットにあることは知っていた。涙を隠す仕草は、もはや百恵には伝わらなかつた。彼はデスクの引き出しからそれを取り出す振りをすると、鍵のかかった引き出しからは「山口」の名の印鑑を取り出した。

涙が乾くまでにはまだ時間があった。ジャンⅡジャックはそのまま百恵には気づかれないうちに、窓辺に向かって歩き出した。そこから新生コスモス園が見えた。こうしていれば、いつものように、後から百恵がすがりついて来るような期待を持ちながら、彼は暫く動かな

かった。しかし、その期待は裏切られた。俯いた百恵の心は、もはや堅く硬く閉ざされていたのである。

「なぜ、貴方と出会ってしまったのだろう……」

ジャンⅡジャックが言った。百恵は動かなかった。

「出会わなければ、貴方をこんなに苦しめずすんだ……」

そして、次の言葉は口には出さなかった。

「出会わなければ、貴方をこんなに愛さずすんだのに……」

そして振り向くとそのままソファに腰掛け、離婚届の夫の欄に「山口浩幸」と書き込んだ。そして印鑑に朱肉をつけると、名前の後にゆっくり押しつけた。

百恵はその光景をぼんやりながめていた。疲れ切った身体で、何かの映画のワンシーンを見ているように、自分とは無関係な世界の傍観者となつて、印鑑の先端をみつめていた。

紙に残った鮮やかな朱色を見たとき、百恵の瞳からひとつ、水色の雫が落ちた。

「ありがとう……。浩幸さんの気持ち、嬉しかった……」

百恵は離婚届を驚掴みにすると、ジャンⅡジャックの鼻もとに彼女のにおいのかすめて走り去った。

残されたジャンージャックは、長い時間、そのまま動かなかった。